

## 一橋大学国際・公共政策大学院 10 周年記念シンポジウム

グローバル・ガバナンス OBOG 代表

堀井里子

この度は一橋大学国際・公共政策大学院 10 周年おめでとうございます。ただいまご紹介に預かりました堀井里子です。昨年の 9 月より秋田県の国際教養大学で講師を務めております。2009 年 3 月に修了してから秋田に戻るまでその大半は海外にいましたが、IPP で 2 年間をともにした友人やお世話になった先生方とは常にコンタクトをとってきました。友人の中には、新たにビジネスを始めた人や IPP 時代に学んでいたこととは異なる分野で新たな挑戦をしている人、国際社会で平和のために活躍している人、東京や地方で政策形成の中核に携わっている人など様々おります。それぞれの分野で活躍する友人には、大いに励まされ、また刺激を受けています。こうした素晴らしい旧友の活躍を見聞きするにつけ、IPP の強みは何だろうかと考えました。私自身の IPP 在籍時の経験やその後の経験を基に、IPP の良さや学んだことを 3 点お伝えしたいと思います。

第一に、挑戦するという気持ちを受け止めてくれる包容力があることです。そもそも、IPP 進学自体が私にとってはひとつの冒険でした。私が入学した 2007 年春に一期生の先輩方が修了されたので、入学を決める段階では IPP を卒業することでどのような進路がひらけるのか分かりませんでした。もちろん、それは先生方もご承知で、入試の面接官であった先生に、あなたが行きたい進路に行けるか分かりませんが、それでも良いですかという趣旨のことを質問されたことを覚えています。逆に、私はそこに学生がイニシアティブをもって動ける自由さや学生の声が反映される柔軟性、新しい仕組みが作られる可能性が期待できると思いました。先が分からないほうが面白いという私の生来の楽観的な見方も重なり、IPP に進学しました。IPP はそれに答えてくれました。在学中は海外へのスタディ・トリップへ挑戦したり、これは政策系大学院全体での

枠組みですが、私が一年の時に始まった霞ヶ関インターンシップなど、それぞれの学生の興味に応じた挑戦の機会が設けられていました。もちろん、日々の授業においてもやはり学部時代とは異なりより専門化しておりましたので大変でしたが、多くのことを学びました。

また、何より感謝していることは、進学という決断をした私をサポートしてくれたことです。もともと IPP 修了後は就職するつもりで実際に就職活動もしていました。その過程で、当時興味を持ち始めていた人の国際移動と国境管理についてもっと研究したいという気持ちを自分の中で確認し、結局その分野に強い海外の大学へ進学することに決めました。とはいえ、当時の私は理論や手法など研究に対するアカデミックな姿勢が整っていなかっただけでなく、英語ができないという大きな壁がありました。私は何とかなると楽観視しておりましたが、今、学生の進路相談にのる教員の立場となり、よく IPP の先生方はあきらめろとも言わず支援してくださったと思います。その後のイギリスでの 4 年半は挑戦の連続であり、何度もやめようと思いましたが、帰国の度に先生方にそして友人に会い励まされ、また一步を踏み出せました。こうしたバック・アップが当時の私を支えてくれました。

第二に、IPP では能動的に動く姿勢を学びました。IPP は MBA や法科大学院など他の専門職大学院と異なり、えられるタスクをこなせば世間一般で通用する資格を得られるわけではありません。自分が何をしたいのか、何のためにここにいるのかという軸がしっかりしていないとやっていけないところです。とくに、グローバル・ガバナンスはなかなか自分たちが何を学んでいるのか規定しづらく、難しいのではないのでしょうか。逆に言うと IPP の 2 年間は、講義やレポートなどのタスクをこなす傍ら、自分の今の立ち位置を確認し、理想とする将来に IPP で経験をつなげるために、どう動くべきなのかを考える機会になりました。受身ではできない作業ですから、楽ではありません。しかしこれを乗り越えることで、修了後も良いスタートを切れたのだらうと思います。

三つ目は、むしろ IPP へのリクエストといってもよいかもしれません。それは、是非、これまでどおり、100 年先の未来を見据えて、既存の枠組みにとらわれない自由な学問、研究を守り、学生にその場を提供して欲しいということです。大学・大学院に求められるものは時代によって変わります。今の時代の要請は、言うまでもなくグローバル化への対応です。これは大学・大学院のみならず教育業界全体に対する時代の要請ですし、これは第一部で先生方がお話されたとおりです。ただしその一方で変わらない大学・大学院の役割もあると思っています。先に申し上げたとおり、私は人の国際移動、すなわち移民をめぐる問題に関心を持っております。この分野は、近年社会科学で注目されている研究分野ですが、その多くの研究の出発点は、「人はなぜ移動するか」ということにあります。しかし私の出発点は、移動を社会の逸脱行動とし、移民を社会の特別な存在とする視点への疑問あり、こうした視点を養ったのは IPP 時代の授業です。これは私の個人的な例ですが、既に社会で確立している制度を変えるにはこうした批判的な考え方を学ぶことがアカデミック、実務にかかわらず重要ではないかと思えます。そういう意味で、今後の日本社会、国際社会を牽引する人材を生み出す IPP には、自由は学問、研究の空間を維持していただきたく存じます。

最後になりましたが、IPP がこうして 10 周年を迎えられたことは、先生方また事務のみなさま方のひとかたならぬご尽力の賜と深く感謝しております。IPP で築いたネットワーク、サポート、研究の基礎、その一つでも欠けてたら今の自分はありません。ここで二年間を過ごせたことを大変幸運に思います。IPP を通して出会ったみなさま、これから出会うであろうみなさまからは今後もご指導、ご鞭撻をたまわれれば幸いです。IPP のさらなる発展を心からお祈りしております。

どうもありがとうございました。